

第41回大宅社一ノンフィクション賞

(日本文藝振興会主催)が川口有美子さんとの「逝かない身体」(医学書院刊)

と上原善広さんの「日本の路地を旅する」(文藝春秋刊)に決まり、受賞者

2人と選考委員が東京都内で記者会見

した。

川口さんの作品は、難病の筋萎縮性側索硬化症(ALS)に侵され、身体の自由を奪われて、いく母親を介護した約12年間の記録。上原さんは自らのルーツでもある被差別部落を全国に訪ね歩き、そこに住む人たちの実相をつづった。いずれも家族や出自という、自身と密接なテーマとの向き合い方が印象的な作品だ。

■大宅ノンフィクション賞 川口さんと上原さんが抱負



大宅社一ノンフィクション賞に決まり握手する川口有美子さん(右)と上原善広さん=東京・丸の内の東京会館

家族や出自と向き合い発信

選考委員の柳田邦男さんは、「ノンフィクションは時代性や新しい価値観の発見についてのメッセージをどう言語化し発信していくかが重要」とした上で、川口さんの作品を「現代医学が近代化された、川口さんの作品を「現代医学が延命技術を発達させる中、生と死の境界で起つた新たな問題についての深気づきを、リアリティのある書かな言葉で表現した」と絶賛。また上原さんについて、「2000年代の被差別部落問題の変化をとらえるために、歴史という縦軸と全国という空間軸の両面から各地を旅し、自らの内面を深めていった」と評価した。

川口さんは「生きていたら母が一番喜んでいたと思う」と涙ぐみながら、「見た目には生を否定されるかのようだ」とこの問題を「(歩)引いて見る仕事を自分なりに継いでいけたと思う。ひとつは日本文化としてアプローチしていきたい」と話した。

被差別部落出身の作家中上健次に影響を受けたという上原さんは「中上のようだ」とこの問題を「(歩)引いて見る仕事を自分なりに継いでいけたと思う。ひとつは日本文化としてアプローチしていきたい」と話した。

川口さんは「生きていたら母が一番喜んでいたと思う」と涙ぐみながら、「見た目には生を否定されるかのようだ」とこの問題を「(歩)引いて見る仕事を自分なりに継いでいけたと思う。ひとつは日本文化としてアプローチしていきたい」と話した。

文化メモ

会館。西澤信吾・近畿大教

授「東南アジアから見た東教

▼京都自由大学 16日後

7時 京都市下京区油小路

松原トルトル町、京都社会

文化センター。細川孝氏「高

学費から『無償教育の漸進的導入』へ日本の未来のため」。500円。同大

学 090-0361-2900 (361-2900)

マ立命館土建講座「東ア

シア共同体を考える」17

日後2時、京都市北区等持

院北町、立命館大末川記念

1-4284。